

学術ジャーナル論文の海賊版サイト Sci-Hub と学術情報流通のゲームチェンジの兆し

初版投稿：2016/10/14

執筆者：林 和弘（上席研究官）

購読費を支払わないと読めない学術ジャーナルの論文を含む世界中の学術論文を無料で公開している海賊版サイト Sci-Hub が、価格が高騰している学術ジャーナルの仕組みとオープン化の流れに新たな問いを投げかけています。

そもそも学術ジャーナルが電子化される前の冊子の時代より、商業学術出版社による寡占化と購読費の高騰化が問題とされてきており、オープンアクセス運動などにより、学術ジャーナル論文へのフリーなアクセスとその自由な再利用が10年以上前から議論されてきました。最近の報告によるとオープンアクセス論文数の増加ペースは、全研究論文数の増加ペースの2倍に達しており、エンバーゴ期間を終えて公開された論文を含めれば、世界の論文の3分の1はオープンアクセスになっているとする報告¹⁾もあります。

第5期科学技術基本計画ではオープンサイエンスの推進がうたわれ、公的資金を得た研究の成果を中心にできるだけオープン化する政策が世界レベルで進められています。しかしながら、依然研究者が読みたいと思うトップジャーナルを含む多くの学術ジャーナルは図書館が購読費を払って読めるものの方が多くのも現状です。

ここで、Sci-Hub(<http://www.sci-hub.cc/>)は、科学の知への無料へのアクセスをうたった学術ジャーナル... Elbakyan氏が始めました。このサイトでは本来購読費を支払わないと読めないジャーナルを含む5000万論文を超える論文を公開し、横断検索できるようにしています(2016年5月現在)。

Science誌²⁾によると、ダウンロード数は2015年9月から2016年2月の半年間で2800万回であり、発展途上国だけでなく日本を含む先進国からのアクセスも少なからずあり、すでに多くのユーザーが存在していることを示唆しています。

もちろん、このサービスは現在の知財系の法律からみた場合は違法であり実際に訴訟も起こっています。しかし、多くの出版者のジャーナルを横断的に統合し、無料で提供するこのサービス自体は研究者にとっては魅力的とも言えます。Sci-Hubに対するアンケート結果²⁾をみても、海賊版論文のダウンロードは悪いと思うか?という問いに9割近くが「そう思わない」と答えています。このアンケート回答者の6割がSci-Hubを利用しているというバイアスがありますが、先の利用度の実態と合わせて研究者の一定の支持を得ていると言えます。

このようにSci-Hubの登場は研究者のコミュニケーションの在り方に新たな問いを投げかけていると言ってよいでしょう。この活動自体は現在は違法ですが、その背景にある、研究者コミュニケーションの新潮流と学術情報流通産業における非連続的で根本的な変化(ゲーム

チェンジ)の兆しに目を向け、科学知を広く効率よく知らしめるより健全なコミュニケーションの仕組みを新しい法制度を含めて整えるべきと考えます。

参考文献

- 1) Open Access Articles Grow at Twice the Rate of All Published Research
<http://www.simbainformation.com/about/release.asp?id=4003>
- 2) John Bohannon , “Who's downloading pirated papers? Everyone,”
<http://doi.org/10.1126/science.aaf5664>